令和3年度

少年の主張全道大会

発表作品集

公益財団法人北海道青少年育成協会
北　　海　　道
独立行政法人国立青少年教育振興機構

目　次

はじめに

公益財団法人北海道青少年育成協会会長　竹谷　千里 …… 1

令和３年度「少年の主張」全道大会発表写真 …… 2

作品集

【最優秀賞】

完璧じゃなくていい　吉野　真帆（洞爺湖町立洞爺中学校３年）…… 4

【優秀賞】

いじめのない未来へ　伊藤　琉希（厚岸町立真龍中学校３年）…… 5
今を生きる私達へ　佐藤　莉子（和寒町立和寒中学校３年）…… 6
すべての個性が輝くために　中山　芽依（美幌町立北中学校３年）…… 7

【奨励賞】（発表順）

「あつかったら　ぬげばいい」
　　－絵本が教えてくれたこと　谷　和珠（長沼町立長沼中学校３年）…… 8
ヘイトクライムと差別　楠田　理子（恵庭市立恵明中学校３年）…… 9
優しさを繋ぐ　土屋　結愛（留寿都村立留寿都中学校２年）…… 10
言葉で変わる人のこころ　設楽　幸（新ひだか町立三石中学校２年）…… 11
違いを楽しむ心をもて　三好　陸翔（函館市立赤川中学校３年）…… 12
対立しても　平田　咲輝（せたな町立瀬棚中学校３年）…… 13
努力で得られるものとは　多田　莉世（天塩町立天塩中学校３年）…… 14
自信をもつために　三浦　瑠夏（礼文町立香深中学校３年）…… 15
一歩手前にあるもの　桒野　結衣（新得町立新得中学校３年）…… 16
ぼくの見える世界　荒井　響稀（別海町立上春別中学校３年）…… 17
誰にでも起こりうること　寒　爽一（札幌市立厚別南中学校３年）…… 18
理解してほしいジェンダーのこと　平山　來夢（札幌市立篠路西中学校３年）…… 19

講　評

審査員長　坂本　征人（北海道中学校長会対策部幹事／妹背牛町立妹背牛中学校長）…… 20

参　考

令和３年度「第43回少年の主張全国大会」～わたしの主張2021～内閣総理大臣賞受賞作品 …… 21

資　料

大会のねらい／大会のあらまし／審査員 …… 22
令和３年度「少年の主張」総合振興局・振興局地区大会の開催状況 …… 23
令和３年度「少年の主張」実施要領 …… 24

「少年の主張」全道大会　歴代最優秀賞並びに優秀賞受賞者名簿 …… 26

はじめに

「少年の主張」全道大会は、昭和54年の国際児童年を記念して始められました。今年もここに作品集を発行し、皆様にご覧いただけることを大変うれしく思います。

この大会は、人格を形成する上で重要な時期にあたる中学生が、日常生活を送る中で感じ、考えていることや未来への夢、希望などを中学生自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、同世代の中学生に周囲の人々や社会との関わりについて、より深く考えていただき、社会の一員として自覚していただく契機とすること、また、道民の皆様が中学生の考え方、感じ方、意見等に直接触れることにより、青少年の健全育成に対する理解と関心を深めていただくことを目的として開催しています。

今、少子高齢化、国際化、情報化等が急速に進展する中、青少年を取り巻く環境も大きく変化しています。そのような中で、彼らの主張に真摯に耳を傾けることは、私たち大人の責任でもあると考えています。
これからの北海道を担う、希望に満ちあふれた輝かしい存在である青少年の皆さんには、自分たちの意見を発表することを通じて、広い視野と柔軟な発想を育むこと、論理的に物事を考えること、自分の主張を他の人に正しく伝える力などを身につけて欲しいと願っています。

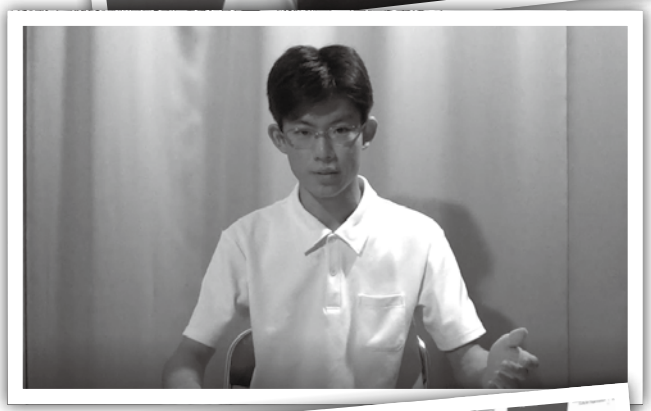
今年の全道大会は、新型コロナウィルス感染症の状況を踏まえ、会場での開催を取り止め、ＷＥＢ開催に変更させていただきました。また、各地区大会においても、動画による審査を実施するなど関係者の皆様には大変ご苦労をおかけしましたが、コロナ禍にも関わらず、道内279校から25,834名の方が応募され、地区大会を経て、16名の方が全道大会に進まれました。この作品集は、その16名の皆さんの生き生きとした主張を掲載したものです。

この作品集を一人でも多くの方に読んでいただくことを願いつつ、本大会を開催するに当たり、ご協力いただいた関係の皆様に心からお礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

令和３年12月
公益財団法人北海道青少年育成協会
会　長　　竹谷　千里

令和３年度「少年の主張」全道大会発表写真

流行



洞爺湖有珠山
ジオパーク
洞爺湖町
TOYAKO TOWN
賞状

最優秀賞　北海道知事賞

完璧じゃなくていい

洞爺湖町立洞爺中学校３年
吉野（よしの）　真帆（まほ）

普通の体になりたい、私はずっとそう思っていました。

私は、耳が悪いです。聞こえてはいるのです。でも、聞き取れないのです。一定以上の高い音や低い音が聞き取れないのです。一番辛いのは、授業中です。先生が「教科書開いて」と言っても聞き取れていなくて、友達に教えてもらったり、先生の話が聞こえていなかったので「もう一度言ってください。」とおねがいして、授業を止めてしまうこともありました。その度に、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

私は、周りの人が助けてくれた時にいつも「ごめんね。ごめんなさい。」
と、謝っていました。

どうして耳が悪いんだろう。もっと普通の体になりたい。周りの人はきっと、迷惑だと思っている、そうずっと思っていました。

そして、耳が悪い私が悪いのだと、自分を責め続けていました。

そんなある時、私の話を聞いてくれた人がいました。

「私、耳が悪くて、周りの人に迷惑かけている自分が情けなくなる。話してても聞こえてなくて、ごめんね。」

と、謝った時のことです。

その人は

「そんなの思わなくていい。なんで謝るの、謝らなくていいからもっと頼ってよ。」

そう言ってくれたのです。

その瞬間、耳の悪いのは恥ずかしいと思っていた気持ちが一気に晴れたように感じました。今まで周りは私のことが迷惑だと思っていたのに、本当は助けようとしてくれていた人がいたのです。

今まで自分が閉じ込められていた世界が解き放されたように感じました。

そして、私は耳が悪いけれど「これが私なんだ」と強く思うことができたのです。よく
「耳が悪いのはかわいそうだね。」
と、言われますが、私はかわいそうではありません。ただ、耳が悪いだけです。そして、耳が悪かったからこそ、人の優しさや、周りの支えに気づくことができたのです。

そう思うと、今までごめんなさい、と思っていた気持ちが、ありがとう、という気持ちに変わりました。耳の悪い私だからこそ、人の優しさに何度も助けられ、大切な人の存在に気づくことができたのです。

世界には、色々な障害がある人たちがいます。私のように耳が悪い人も、目が見えない人、手足が不自由な人。また、身体が不自由と言うだけではなく、自分に自信がなかったり、自分の存在自体を受け止められない人もたくさんいると思います。

でも、それは悪いことでも、かわいそうなことでもない。人と違うところがあるとしても、自分に欠けているところがあると思うことがあっても、そのままでいいのです。身体が不自由でも、自分に自信がなくても、だからこそ気づける優しさが、周りにきっとあります。

私たちはみんな、完璧な存在ではありません。完璧ではないからこそ、見える世界があるのです。

みんなたくさんの人に助けてもらって、今を生きています。家族はもちろん、友達、先生、大切な人、見知らぬ人、本当にたくさんの人です。今を笑顔で過ごせているのはその人たちのおかげです。私はもう、自分を責めたりなどはしません。この世界にこの体で生まれたことは一つの奇跡だと思うからです。それを気づかせてくれたのは、人の優しさです。完璧でなくても、その隙間を埋めてくれる。

人の優しさに気づけたらみなさん、このことを思い出してみてください。完璧である必要がないということを。完璧ではないからこそ、支え合える世界があるということを。

世界には、色々な人たちがいます。私たち一人一人が手を取り合って、堂々と自分を好きでいられる世界をつくっていきませんか。

優 秀 賞　北海道教育委員会教育長賞

いじめのない未来へ

厚岸町立真龍中学校３年
伊藤（いとう）　琉希（るき）

「いじめ」という言葉が世に出てから、どれくらいの時間が過ぎたでしょうか。今までにどれくらいの人が悲しみに暮れ、時には命を落とすこともあったでしょうか。時代と共に「いじめ」の形も変化し、直接的なものからＳＮＳなどの間接的なものへと、より陰湿になってきています。

僕はいじめをしている人に問いたい。いじめをして何が楽しいのかと。心に傷を負わせたり、自殺に追い込んだりする重罪を犯して、自分は知らない、関わっていないと逃げる人。他の人に罪をなすりつけてなぜ自分だけ逃げようとするのか。そんなことは今すぐやめて下さい。

僕が小学生の頃一人の女の子が転校してきました。その子と仲良くなるのに時間はかかりませんでした。休み時間に遊ぶことが増え、話すことも多くなりました。ある日の帰りのスクールバスで彼女が隣に座ってきました。彼女は唐突に小声で「私ね、前の学校でいじめられていたの」と言ってきました。驚いて理由を尋ねると、きっかけは教室で一人で本を読んでいるときに、友達から急に悪口を言われて口論になり、そこから嫌がらせが始まり、相手の数が増え、いじめに発展したそうです。僕はその理不尽さに怒りを覚えました。彼女は悪くないのに、友達が言った悪口で彼女の学校生活は崩れてしまったのです。僕はあまりのことに声をかけることが出来ませんでした。でも、意を決して彼女にどのようないじめを受けていたのか聞きました。靴の中にはさみが入れられていたり、机に落書きされていたり、椅子に画鋲が置かれていたりしたそうです。彼女がこんな悪質ないじめを受けていたなんて僕は信じられませんでした。彼女が苦しんでいたのに話を聞くことしか出来ない自分に腹が立ちました。前の学校のこととはいえ、傷つき辛かったであろう経験を自分に話してくれた彼女の気持ちを考えると僕も辛くなりました。「どうして誰にも言わなかったの」と彼女に聞くと「いじめがひどくなるのが怖くて誰にも言えなかった」と答えました。彼女は自分の思いを言うことが出来ず、ずっと耐えてきたのです。そんな状況からこちらに転校してきて僕が友達になれたことに何かの縁を感じました。そこで僕は彼女と一つ約束をしました。「もしまたいじめがあったら絶対に守る。もういじめなどさせやしない」と。彼女は少し寂しげに笑って「ありがとう」と言ってくれました。その一年後彼女はまた転校してしまいました。転校する前日に彼女から手紙をもらいました。その手紙には「あの時の約束は今でも覚えているよ。本当にありがとう。私は転校してしまうけど琉希君と一緒に過ごした時間は忘れないよ」と書いてありました。この時の嬉しさは今でも忘れられません。こんな僕でも誰かを助けることができると実感したからです。僕にはいじめられた経験がありません。それまではいじめは自分には関係のないものだと思っていました。でも彼女の話を聞いて、いじめが身近にあるものだと気付かされました。

そのときから僕は、いじめというものが非常に悪質なものだという認識を改めて持ちました。もし彼女があのまま元の学校にいたらどうなっていたでしょう。今でも苦しんでいたかと思うと恐ろしくなります。いじめは絶対に風化させてはいけません。いじめは簡単に人を死に追いやってしまう危険性をはらんでいますし、謝っても許されることではありません。自分が犯した罪を一生背負って生きていくことになってしまいます。

だから僕はいじめに対し、見て見ぬふりは絶対にしたくありません。相手のターゲットにされる危険性はありますが、一歩踏み出すことによって救える命があるかもしれないのなら、僕は立ち向かいます。

僕一人の力だけではいじめのない未来を実現させることは出来ません。しかし一人一人が勇気ある一歩を踏み出せたら、それも可能だと思います。みんなで心と力を合わせていじめのない未来を作りましょう。

優 秀 賞　北海道PTA連合会会長賞

今を生きる私達へ

和寒町立和寒中学校３年
佐藤（さとう）　莉子（りこ）

朝、教室に入ると、聞こえてくるのはいつもと変わらない仲間の声。少し遠くなってしまった席に着き、授業を受ける。一言も話さない静かな給食を終え、また授業を受ける。

こんな、変わりきってしまった生活の中で、あなたは何を思い、何を感じますか。

新型コロナウィルス感染症が確認されたあの日から約２年。その被害は留まることなく今も尚猛威を振るい続けています。私達の当たり前は奪われ、今はこんなマスク生活が私達の新たな「当たり前」になりかけています。そんな中、私は５月６日から５月９日までの４日間、修学旅行に参加してきました。残り１年しか一緒に過ごすことの出来ない仲間とたくさんの思い出を作ることができて、とても有意義な時間でした。仲間と道に迷いながらも目的地を見つけたあの時も。バスで話した何気無い会話も。今となっては戻ることのできない全ての時間が私にとってのかけがえの無い思い出です。そんな思い出話をしていると、先輩は言いました。

「じゃあ×××には行けなかったの～？
可哀想だね～」

可哀想。大人は、世間は皆、今の時代を生きる私達にそう言います。毎年出来ていたことが出来なくなったり、出来ることが減った私達は可哀想。確かに私自身そう感じていました。もちろん、そのように考える学生の人も多いでしょう。ですが、果たして本当にその一言で今ある思い出や、これからの生活をまとめあげてもいいのでしょうか。確かに私達は今回の修学旅行でコロナの影響を受け、行けなかった観光地も、出来なかったこともありました。しかし、今私が大切にしている思い出があるのもまた、この世の中だからできたものなのです。

目に見えないウィルスは、私達からあまりに多くのものを奪っていきました。何気無い日常も、特別な行事も、そして大切な人さえも。でも、だからこそ私達は、この社会に対応していける柔軟さと、周りの人を守ることの大切さを知れたのではないでしょうか。

私は今、中学校の生徒会長をしています。

様々な企画や行事を運営する立場として、心に留めているモットーは、「出来ないことより出来ることに目を向ける」ということです。制限されたことを嘆き、悲しんだって、それは誰のせいでも、時代のせいでも無いので仕方がありません。それより、こんな世界でも他に出来ることはたくさんあります。例えば、学校祭が密を避けたプログラムしか実行できず、時間も短縮しなければいけないのなら、短時間で皆が平等に楽しめる、一年間の思い出を使ったスライドショーを上映します。体育祭の応援合戦が出来ないのなら、お揃いの八巻きに寄せ書きをし合います。こうすれば、仲間との団結感を目で、肌で感じることが出来ます。そしてこれらは、私が実際に提案し、実行されたプログラムです。工夫次第で私達は、誰かを楽しませることも、誰かを笑顔にさせることも出来るのです。

今の窮屈な世の中だからこそ、こんな風に前を見て、少しでも明るく生活をすることが大切なのではないでしょうか。もちろん、時には振り返り、過去を思い返すことも大切です。しかし、起こってしまったことはもう変えられません。だから私達は、前に進むしかないのです。目標にしていた大会が中止になった時。本当に会いたい人に会えなくなってしまった時。歪んでしまった世界を恨みました。けれどそれでもがむしゃらに前に進むしかないのです。私に、あなたに、それが出来ないわけがありません。なぜなら、私達は一人じゃないから。辛くなったって、泣いてしまったっていい。ただ一つ、この世界に負けないでください。こんな歪んだ世界を最高な世界に変えていけるのは、今を生きている私達しかいないから。これが私の、社会や世界に向けての意見と、未来に向けての提案です。

優秀賞　公益財団法人北海道青少年育成協会会長賞

すべての個性が輝くために

美幌町立北中学校３年
中山（なかやま）　芽依（めい）

個性とは、星のようなものだと思う。広い世界で、それぞれ違う色をした光を身にまとったたくさんの星々。「その人や物がもつ、とくべつの性質」という意味の、誰もが必ず持っているもの。今日私が主張したいのは、そんな個性についての話だ。

最近、道徳の授業などで、個性の大切さを学ぶ機会が増えたと感じる。そんなとき、よく聞く言葉がある。「個性を大切に」、「お互いの個性を活かし合って」。誰もが一度は聞いたことのある言葉だが、それがどれだけ重要で、そして難しいことなのかきちんと理解している人は少ないだろう。個性は人の数だけ存在する。しかし、地球上すべての人の個性をあますことなく活かすためには、たくさんの努力と時間を要するし、犠牲だって必要になるかもしれない。

それでも「個性を大切に」とよく言われるのは、今の私たちの暮らしが個性なしでは成り立たないからだと私は考える。先人たちの個性的な閃きやアイデアのおかげで、テレビも、スマートフォンだってできたのだから、私たちのくらしには個性が不可欠だといえるだろう。そんな無限の可能性を秘めている個性も、きっと誰のものであっても、いつでも輝いているものだと思う。

しかし、私たちの大切な「個性」の光が弱まり、そして消されてしまうことだってある。差別はその要因の一つだと思う。「自分と違う考えは認めない」という思考を正当化し、自分と異なる者を排除しようとする。人には、それぞれ違った思考をもつ権利があるはずなのに、それを無視してでも自分の考えを押しつけることは、相手を酷く傷つけ、個性の光を踏みにじって殺してしまうことだと思う。

相模原で起こった悲しい事件を覚えているだろうか。「津久井やまゆり園」の入所者十九人が殺され、二十六人が重軽傷を負ったあの悲しい事件から五年ほどが経った。私は当時を今でも忘れられない。亡くなった女性の母親は、「娘が不幸をつくると勝手に決めて奪われたことに、やり場のない思いを抱えています。」と語っていた。「戦後最悪」とまで言われ、人々の心に深く傷を負わせたあの事件も、互いの個性を認め合うことができれば、防げたのではないかと私は思う。

以前、父に障害について話をしてもらったことがある。父は私に、「障害とは、人がもともと持っている特性や個性に生き辛さが加わったもの」だと教えてくれた。しかし、「支援ツールや周囲の理解などがあれば、その生き辛さを取り除くことができる」とも言っていた。個性をその人の生き辛さにしてしまわないためには、どうしても周りの人々の理解が必要になる。障害も、私たちの持っている個性と何も変わらないのだと、互いに認め合うことが大切だと思う。でも、それは障害をもっている人を可哀想に思うこととは違う。個性の違いを理解し、認め合い、色々な個性の共存が許される、「多様性のある社会」をつくることが大切だと思う。

人には色々なものの考え方がある。それも「個性」だ。この主張が、あなたの考え方を変えるきっかけとなってくれれば嬉しいが、そう感じない人もいるし、もちろんそれでいい。けれど、もう一度考えてみてほしい。命の重さはみんな一緒で、全員が平等だと気付いてほしい。そして、互いを認め合うことのできる、「多様性のある社会」にするにはどうすればいいか、深く考えてほしい。その第一歩として、今も個性の違いが認められずに苦しんでいる人が多くいるという現状を知ってほしい。そうすることが、多様性のある社会の実現に欠かせないことだと思う。

いつか、全ての個性の星がその人らしく自由に輝く時代がくると私は信じている。どれだけ時間がかかったとしても。

奨励賞

「あつかったら　ぬげばいい」
― 絵本が教えてくれたこと

長沼町立長沼中学校３年
谷（たに）　和珠（かずみ）

「私は、独りぼっちじゃない。」
そう思えたのは、最近の出来事でした。
これまで私は、悩んでばかりいました。
特に友達関係にはいつも気を遣ってきました。
ささいなことで､友達とうまくいかなくなり、お互い陰口を言い合ったり、裏切られたり。自分を信じてくれる友達は誰なのか、誰を信じればいいのか、先の見えない暗闇の中にいるようでした。家庭でも、自分の思いを聞き入れてくれないことや、細かなことまで注意されることで、両親とぶつかることが多くなりました。何事もうまくいかず、辛い毎日に押しつぶされそうになりました。なぜ、私ばかり悪者にされるのか。なぜ、誰も私をわかってくれないのか。私は孤独でした。
ある日のこと、父が一冊の絵本を薦めてくれました。中学生の私は、なぜ今更絵本なのかと、最初は否定的に考えていました。仕方なく絵本を開き読み進めていくうちに、絵本に夢中になっている自分がいました。
「ひとのふこうをねがっちゃったらなみうちぎわにかけばいい」
「つかれているのかどうかよくわからなくなったらつかれたことにすればいい」
かわいいイラストに、単純な一文が添えられた絵本でした。読み終えた私は、肩の力がすっと抜けていくようでした。嫌なことも我慢せずに、時には吐き出せばいい。自分にもっと素直になればいい。言われるまま、今思っている嫌なことを､紙に書いてゴミ箱に捨ててみました。母と喧嘩した後は、疲れたことにして寝てみました。気がつくと、この絵本に、今の自分を認めてもらえたようで、嬉しくなりました。
父は、私が大きなストレスを感じていることに、気が付いていたのでしょう。父は、絵本を通して私に手を差し伸べてくれたのです。言葉に表さない父の優しさを受け取ったようでした。
この絵本をきっかけに、私の心に明かりが灯ったような気がしました。
私は独りぼっちではなかったのです。誰も私のことを理解してくれないというのは、私の誤解でした。親は私のことを見てくれていたのです。絵本の言葉も私を励ましてくれました。
すると、だんだん気持ちが楽になり、ゆとりが出てきました。
「あつかったら、ぬげばいい」
当たり前のことを素直に受け止めて、難しく考えずに、前に進んでみればよかったのです。
「私は、私らしく生きていけばいい。」
そう思えるようになると、細かなことにいちいち腹を立ててきた自分の幼さが、恥ずかしくなりました。
私が悩んでいたとき、親も同じように私との接し方に悩み、それで絵本に思いを託し、伝えてくれたのかもしれません。
どうして私ばかりが、と自分の殻に閉じこもる私を救ってくれたのは、自分は独りではないと感じることでした。独りで苦しみ続けるのをやめて、ゆっくりと呼吸をしてみたら、世界の広さや私と繋がるたくさんの人の存在あたたかさに気づくことができたのです。
このコロナ禍の中、私たちの間には埋めきれない距離と時間が出来てしまいました。
孤独を感じ、不安も増しています。でも、こんな今だからこそ、お互いの心と向き合い、心をつなげることが必要です。お互いの弱さを認め合い、手を取り合うことで、私たちの心は強くなれるのです。前に進むきっかけは、どこにでもあるのです。私にとっては父からもらった絵本であったように。
だからこそ、気づいてほしいのです。私たちは独りではないことを。私たちは強く生きていけることを。

奨励賞

ヘイトクライムと差別

恵庭市立恵明中学校３年
楠田　理子（くすだ　りこ）

みなさんは「ヘイトクライム」という言葉を知っていますか。ヘイトクライムとは、人種や宗教、個人の考え方などが違う人への差別行為を指します。

近頃、アメリカやヨーロッパでは、アジア人へのヘイトクライムが相次いで起こっています。ニュースではニューヨークの街を歩いていたアジア人の女性が黒人女性に殴られる事件が大きく報道されていました。この映像を見て、私も殴られているような感覚になり、恐怖とともに強い怒りも感じました。このことがきっかけで、私はヘイトクライムについて関心を持つようになりました。

なぜ、このような悲しい出来事が起こってしまったのか。ヘイトクライムの動機は、自分と違う考えを認めないといった偏見や排他的な思考である場合が多いようです。例えば、男子が男子を好きになることを認めないといった同性愛者に向けた嫌がらせもヘイトクライムの一つとなります。アメリカの歴史では以前から白人が黒人を差別することが大きな社会問題になっていました。特に今、大きな問題となっているアジア系の人々へのヘイトクライム。その中には暴力を振るわれて亡くなってしまった方もいます。私は将来、海外に留学して英語や異文化を学びたいと考えていますが、このような差別が続くと不安を感じてしまいます。

一方、YouTube や Twitter に投稿されているアジア系の人々を差別・中傷する動画には、日本語で書かれた白人や黒人の人たちに対する差別や誹謗中傷のコメントで溢れていました。このように、差別が差別を呼び、新たな差別を生む、とても残念で悲しい悪循環ではありますが、このことは私たち中学生にも無縁なことではないと思います。

これまで、人を見た目で判断したことはありませんか。また、相手と意見が合わず、その人のことが苦手になったり、仲良くできないといったことはありませんか。中学生の間で起こる嫌がらせや陰口などのいじめは、容姿や周囲の人と考えが違っているからといった理由が多いようです。このような身近な差別が、人種差別やヘイトクライムにつながっていくのではないでしょうか。

みなさんは、差別でつながる世界を、どう思いますか。見た目や考え方が違っていても、同じ人間には変わりありません。ですから、私たちがすべきことは差別ではなく、相手を「知る」ことだと思います。様々な国の人、文化、考え方を知り、理解することで、私たちはもっと周りの人たちに歩み寄ることができるのではないでしょうか。相手の意見に対して、「自分と違っているから」と批判するのではなく、「みんな違ってみんないいんだ」と受け入れてみてください。自分を認め、相手を理解できる人がたくさん世界にいるのであれば、差別は大きく減っていくと思います。

「自分」という人間はこの世の中に一人しかいません。同じように、自分以外の人々も見た目や考え方などが違う唯一の存在なのです。いつの日か、差別のない、互いを大切にし合えるような明るい未来になっていくことを願います。

奨励賞

優しさを繋ぐ

留寿都村立留寿都中学校２年
土屋（つちや）　結愛（ゆめ）

皆さんは、見ず知らずの人に優しくしてもらって、嬉しかったことはありますか。

一昨年の夏休み、私は妹と二人で母の実家がある和歌山に行くことになりました。それまで親と一緒に行くことはあっても、子どもだけで行くという経験はなかったのでとても不安でした。飛行機の座席に座るとき、妹が「えー、窓のところが良かった！」と言いました。しかし、私達が座る席は通路側で、窓際にはすでに数人の人が座っています。飛行機は指定席なので、席を変えることはできない。そう思った私は、妹に声をかけようとしました。そのとき、窓際の人たちが「よければ私の席に座ってください。」と言ってくれました。そして、その人たちだけではなく、妹の言葉を聞いた客室乗務員の人たち、近くにいた乗客の人たちも「こっちにおいで。」「景色きれいだもんねー。」と言いながら私達が窓際に座れるように動いてくれました。その後、飛行中も周りの席の人たちが面倒を見てくれたり、体調の心配をしてくれたり。飛行機から降りるとき、皆さんにお礼を言うと、「大したことじゃないよ、これから楽しんできてね！」と言ってくれました。

他にも、落とし物を届けてくれた高校生、雨のときに傘をくれた女性。小銭を拾ってくれた人たち…。たくさんの人からの優しさに触れ、とても嬉しくなりました。

このような場面は、きっとたくさんあるのではないでしょうか。私はここで大切な考えは「恩送り」だと思います。

「恩送り」とは、誰かから受けた恩を直接その人に返すのではなく、別の人に送ることです。自分が優しくされたぶん、他人に優しくする。これと似た言葉に、「恩返し」があります。恩返しは聞いたことがあるけれど、恩送りは初めて聞いた、という人が多いかもしれません。

この言葉を知ってから、私は今まで受けてきたたくさんの優しさを繋いでいきたいと考えるようになりました。恩返しは、自分と相手の二人の関係で終わってしまいます。しかし、恩送りは、自分が誰かに優しくすることで、たくさんの人と優しさを共有することができます。

でも、実際に誰かに親切にするとなると、難しい部分があります。私自身、家族や友達など、身近な人に親切にすることはできます。しかし、通りすがりの人や、見知らぬ人には恥ずかしくて勇気が出ず、行動を起こすことができません。皆さんにも、同じような経験はあるのではないでしょうか。

でも、優しさや恩には「人助け」だけではなく「笑顔」や「思いやりのある言葉」も含まれるのではないかと思います。だから、最初は身近な人に笑顔で声をかけたり、元気よく挨拶をしたりすることから始めていきたいです。これが、今私ができる恩送りであり、優しさを繋ぐことでもあると思うからです。

人は一人では生きていけません。誰もが支え合いながら生きています。私は中学生、まだまだ支えられることのほうが多いですが、今自分ができることから始めていきたいです。そして、今まで、またこれからも、私に優しくしてくれた人たちの優しさを、今度は私が誰かに繋げていきたいです。

今、あなたが誰かに優しくすることで、誰かの一日が明るいものになる。知っている人にも、知らない人にも、小さな親切を積み重ねていくことで、たくさんの人の一日がより良いものになる。恩送りが広がることで、優しい世界に繋がるのではないでしょうか。

リレーのバトンのように、駅伝のたすきのように。皆さんも、優しさを繋いでみませんか。

奨励賞

言葉で変わる人のこころ

新ひだか町立三石中学校２年
設楽（しだら）　幸（さち）

「自由でいいんだよ！」

私はその言葉に救われた事があります。みなさんもそのような経験がありますか？

私は自分自身が言葉によって救われた経験があるので、みなさんにも言葉の重みや大切さを伝えたいと考えました。

私は、小学三年生の時からドラムを習っています。その頃の私は、自分に自信がもてないせいで知らない人と話す事や人前で発表する事がとても苦手でした。

ドラムを習い始めてから一年が経ち、レッスンにも慣れてきた頃

「ドラムのコンクールに出てみない？」

と、先生に誘われました。内気な性格が邪魔をして、とても迷いました。

しかし、（やってみたい！変わりたい！）と強く思いコンクールに出ることを決めました。

難しいテクニックを使いこなすために、一生懸命練習を重ねました。しかし、なかなか克服できなかったのが表現力です。

自信のなさが演奏に表れ、楽譜通りの演奏ができても表現の部分で大きくつまずいていました。その時です。先生が

「自由でいいんだよ！楽譜通りじゃなくても自分らしく楽しく叩いてごらん。間違えても大丈夫。」

と言ってくれました。その言葉を聞いて、心殻が破れました。

その後も先生は、できないことを指摘するのではなく、できることを認め褒めてくれました。

また、肩の力を抜くことや、指や関節の動かし方など、いつも丁寧に楽しく教えてくれました。それでも難しくて挫けそうになる事もたくさんありました。

コンクール当日、京都の見たことのない大きなステージや、出場者の緊張感ある雰囲気にあっとうされました。リハーサルやステージ裏ではとても緊張していました。手には汗をかき、心臓の音が耳のすぐ傍でバクバクと鳴っているようでした。それに気づいた先生が、緊張をほぐす為に、昨日食べたものの話や、たわいもない会話をしてくれました。そして、

「楽しんでおいで」

と、ステージに送り出してくれました。おかげで私は楽しく演奏することができ、満足のいくパフォーマンスができました。

演奏後、先生がとても嬉しそうに喜んでくれたことを覚えています。

今までの練習の成果が、コンクールの結果に表れ『最優秀賞』をとることができました。結果を知った時、私は涙が出るほど嬉しかったです。家族も喜んでくれ、（頑張ってよかったな）と心の底から思いました。

この経験から、学校生活や私生活でも少しずつ変わっていきました。自信を持って自分の意見を人に伝える事。役員などに挑戦する事。色々な場面で自分の力を出せるようになりました。

先生からは言葉の大切さや相手を思いやる気遣いを学びました。先生の言葉の中には優しさや（一緒に頑張ろう！）という心の支えがありました。

私は先生やたくさんの人に背中を押してもらい、今の自分があると感じています。私の目標は『背中を押される人』から『背中を押す人』になることです。そのために、これからの出会いや、経験、一つ一つの言葉を大切にします。

奨励賞

違いを楽しむ心をもて

函館市立赤川中学校３年
三好（みよし）　陸翔（りくと）

人にはそれぞれ好きなもの、ことがあるだろう。その物事とはなぜ出逢い、好きになったのか。「流行」を挙げる人が多いだろうが、僕は、その「流行」に違和感を抱いている。一人ひとり好みや価値観は違うのに、多くの人が同じ対象を好むのはおかしいからだ。

例えば、話題になっている映画やファッション、言葉や音楽を、多くの人が良いと言っているから自分も好きになることは僕の身の周りでもよく聞く話だ。また、学校生活を送っていると、自分の意見はあるのに、影響の強い人に何となく流されて、はっきりと伝えられない。自分の意見に自信をもって判断、行動ができる人というのは少数派に感じる。

理由として考えられることは、インターネットの普及、そして「自分の自信のなさ」であろう。一つ目のインターネットだが、僕達は常に旬の情報が手に入る環境にある。多くの人が良いと言っているものが良いもので、悪いと言っているものが、悪いもの、という風に大衆の意見がそのままコピーされ、価値観が均一化されているのは良くないことだ。

そして、二つ目にあげたように、自分に自信がないからといって、意見を貫き通すことなく他人の意見に身をまかせてしまってはいけない。自分の意見はしっかりと貫くべきで、人それぞれ、違った価値観や考え方があるからこそ、新しいものが生まれてくると思う。他人の意見はあくまでも参考程度にとどめ、自分の心は自分で決めるべきだ。その考えが間違いであったとき、自分で決めたのであれば「仕方ない」と思えるが、他人の意見に従った場合は、とても後悔する結果になる。

そのようにならないためには、自分に自信がもてるよう、「これだ」と思うものを本気で大事にするべきだ。多くの人に出逢い、たくさん学びを蓄積することで、自分なりの「ものさし」をつくる。経験や体験から、はっきりした基準があれば、他人に流されることはないはずである。

そしてもう一つは、違いを楽しむ心をもつべきだと思う。服装、肌の色、目の色、SNSの話題…。みんなが同じものを良しとするところに、広がりや発見はない。違いを認め合うことを当たり前なことにしなければならなく、さらに尊重しあうことで自由に物事を表現出来、発展する未来が広がるのではないだろうか。

最後に、吉田松陰の「諸君、狂いたまえ」という言葉を紹介しよう。これは、常識に惑わされず、現状に満足せず、自分の信じる道を進めという意味である。異なった価値観だからこそ、交わっていろんなものが見えてくるという。だからぼくは、今までの「流行」ではなく交わる「流交」という言葉を提案したい。自分の考え方や行動が、多くの人を良い方向へ変えたり、動かしていけたりできるようになればいい。そして、自分の言いたいことは自信をもって伝え、違いを楽しむ人間でありたい。そういう生き方をしていると、多くのものを得ることができる。自分のしたいことや生き方だって見つけられそうな気がする。自分の大切にしたいことを曲げず、人とかかわっていくと、それがおのずと自分に変化をくれるはずだ。

自分はどんな人間かを知る事ができる機会はたくさんある。誰かと一生懸命かかわることで、その人の価値観を知る事ができる。それを一旦受けとめ、こんな考え方もあるんだと認めた上で、その考え方をもとに自分の考えを深めたり、自分はどうだろうという風に人との違いを知ることができる。

「違い」を楽しもう。新しい世界を発見し、広く、大きな考え方をもとう。まわりの考え方に合わせる「流行」ではなく、いろいろな考え方が交わる「流交」のインフルエンサーを目指して。

奨励賞

対立しても

せたな町立瀬棚中学校３年
平田（ひらた）　咲輝（さき）

皆さんは誰かと「対立」をしたことがありますか。きっと誰もが経験しているでしょう。様々な性格や考え方の人たちが集まった環境の中で、対立が生まれるのは必然です。

私がこのようなことを考えるようになったのは、私自身が日々の学校生活の中で経験してきた「対立」から感じたことがきっかけです。

私の学級はみんなとても仲が良いのですが、その分よく対立が生まれ、けんかになったり、学級の意見がまとまらず険悪なムードになったりすることがあります。でも私は、両方の意見を聞いていて、「どちらも間違った意見ではないのに。もっとみんなにとってプラスにならないのかなぁ。」と思っていました。

しかし、そんな私も「対立」を経験することになりました。相手は母です。その日私にはするべき宿題がありましたが、すでにやり始めたゲームに夢中になっていたので、きりのいいところまで終わってから宿題をしようと考えていました。しかし、母はそんな私を見て、「ゲームをやめて宿題をしなさい」と言いました。私は、今夢中でやっているゲームを途中でやめろと言われたことや、宿題をするとしっかり決めていたのに、きっとゲームをやめないのだろうというような母の態度にカッとなってしまいました。激しい言い合いになってしまい、結局母に言い切られて、怒ったまま宿題をやり始めました。

その数日後、今度は母と兄が同じような言い合いをしていました。それを客観的に聞いていると、今度は母の言っていることがよくわかるのです。あの時の自分は、母の考えをきちんと聞いて理解しようともせず、自分の考えもしっかり説明できないまま、ただのけんかになっていました。

この経験から私は、対立しているときは、お互いが自分の意見を通そうとするあまり、相手の意見をきちんと理解できていないことが多いと気づきました。自分が正しいとか良いと思った意見を真っ正面から否定されると、カッとなって対抗心がわいてきて、余裕がなくなってしまうようです。それで相手の意見も理解できないのです。

相手の意見をよく聞けば、もしかしたら、自分とは違うもっといい考えや方法が見つかるかもしれません。お互いの意見を合わせたら、もっといい新しい考えがうまれるかもしれません。そうなれば、自分の意見を通すことより、自分にとってずっと得です。私も、母と言い合ってから先に宿題をやっていますが、その方が、心おきなくゲームができて、確かにいい面もあります。

意見の「対立」を「感情の対立」つまり、ただのけんかで終わらせるか、意味のあるものにできるかは、「もっといい考えがあるかも」と相手の意見を理解しようとする「心の余裕」次第だということがわかりました。

私たちは今、コロナ感染症の影響で、様々なことに気を遣い、様々なことを我慢して、ただでさえ心に余裕のない日々を過ごしています。でも、そんな時こそワンテンポおく心の余裕をもつことで、お互いの対立する意見を尊重し合い、心の「対立」がない関係を作っていきたいと思います。

奨励賞

努力で得られるものとは

天塩町立天塩中学校３年
多田　莉世（ただ　りせ）

「努力は必ず報われる。もし報われない努力があるのならば、それはまだ努力とは呼べない。」この言葉を皆さんならどう思うでしょうか。たしかに報われた人間からしたら、報われなかった人間の努力はまだ、「努力した」と言えるものではないのかもしれない。でも自分なりの努力をすることで、結果だけでない「なにか」を得ることができるのではないかと私は考えます。

私には熱中しているものがあります。それはクラリネットです。音楽が好きだったので、中学校に入学する前から「部活動は吹奏楽部」と心に決めていました。しかし、楽器にはどんな種類があるのか何もわからず、母親が昔にやっていたらしいクラリネットに興味を持ち、体験入部をしました。先輩が吹くクラリネットの音を聞いた時の感動、体験で音が鳴った時の喜び、それらが私の単なる興味を「クラリネットを吹きたい」と思う感情に変えました。そして担当楽器に。

好きな楽器を始めたのはよかったものの、私にはセンスというものが全くありませんでした。音楽は好きだったけど知識が追いつかない。技術が追いつかない。音をきれいに出すことができず、曲の雰囲気に合わない。リードミスを連発。一つ一つミスをするたび、部員に迷惑をかけてしまう。音をきれいに出せるように教えてくれる先輩がいるのに、成長できない自分が情けない。悔しい。そんな気持ちから、自分の音を先輩の音に近づけられるよう、練習を重ねました。時間はすごくかかってしまいましたが、あるとき先輩が「莉世の音、丸くなったね。」とほめてくれるようになりました。そして、「頑張ってよかった。」「もっと頑張ろう。」と思えるようになっていきました。

しかし先輩が引退してしまうと、自分の音の課題、曲の吹き方の課題など、今まで先輩に頼ってきた部分が見えてきて、いくつもの課題が私にのしかかってきました。

先輩がいなくなって、同級生だけで出場するコンクール。先輩に頼ることができなくなり、それまでの練習以上に考えて、繰り返して。自分には何が足りていないのかを見つめなおし、改善するにはどんな練習をしたらよいのかを考える大きなきっかけとなりました。

たくさんの練習をして、少しだけ自信がついてコンクールに出場しました。でもまだまだでした。

春になり後輩ができました。後輩に教えながら自分の練習にも取り組まなければならなくなり、余裕がなくなりはじめました。

夏のコンクールは、新型コロナウイルスの影響で中止となってしまいました。このコンクールで全道に出場することを目標としてきたのに、本当に悔しかったです。

そんな中、冬のアンサンブルコンクールとソロコンクールは開催され、出場することができました。一年生の頃からソロコンクールに出場したいと思っていたため、自らソロコンクールへの出場を希望しました。学校ではアンサンブルの曲。楽器を持ち帰り家ではソロの曲。部活動を始めていちばん努力をした期間でした。コンクール当日、演奏を終えて結果が発表されました。結果はどちらも金賞でした。そして管内の代表にも選ばれました。このとき「努力は報われるんだ。」と思いました。だからその後も全道大会に向けて練習を続け、努力を積み重ねました。それでも全道の壁はやっぱり高くて、自分の限界を知りました。「努力は報われる。」と思っていたけど、必ず報われるわけではないことをそのときに知りました。しかし、同時に「努力することの大切さ」について知ることもできました。努力しても必ず報われるわけではないけど、まずは努力をしないと報われることは絶対にないこと。初めから諦めたら何も変わらないこと。努力し続けることでこれらの大切なことを私は学びました。

努力しても必ず報われるわけではないからといって努力をせず、諦めてしまうことはもったいないと私は思います。そして努力の過程や大きさは他人と比べる必要もありません。努力は目標に向かって練習、勉強を続けていき、自分自身と戦い続けることだと私は考えています。

皆さん、１パーセントしかない可能性でも信じて努力し続けてください。結果だけでない大切な「なにか」を得ることができるはずです。

奨励賞

自信をもつために

礼文町立香深中学校３年
三浦（みうら）　瑠夏（るな）

自分に自信がある？
胸をはって生きている？
自分を愛することができている？

私はいつも自分のいやなところばかり見て、人と比べては落ち込んで……。そんな自分に自信をもてずにいました。しかし、ある出来事を境に、少しずつこの気持ちが変わっていきました。

きっかけは去年の秋の終わり頃。学校祭があり、とても忙しい時期でした。

私はいつもなんでも完璧にしようと、「もっと、もっとできる！」と自分を追い込んでいく性格でした。そして、「自分ががんばれば大丈夫」とあまり人に頼らず、すべて一人で何とかしようとしてしまい、周囲の期待に応えるため、「私がやらなきゃ！」と自分自身を追い込んでいきました。

そんな毎日だったので、家に帰るとどっと疲れが押し寄せてきて、夜になると、言葉では言い表せない、まるで心にぽっかりと穴が空いたような、暗く沈んだ気持ちになりました。

でも、学校でみんなと楽しく過ごしている時は、そんな感情は消えていました。優しく面白い友達がいて、毎日が充実しているのに、なぜ家に帰るとこんなにも気分が沈むのか。自分でもわからず、“もうつらい、苦しい、誰か助けて”と、心の中はもうボロボロでした。

ある日、私は勇気を出して母に言いました。

「最近孤独に感じてなぜか悲しくて、すごくつらいんだ。」

すると母は、

「孤独に感じるとか言われたら、ママだって悲しいよ！」

と少し強く、でも少し悲しそうな顔をしていました。「大丈夫？どうしたの？」という優しい言葉を期待していた私は母の思いもよらぬ言葉に驚きました。そして母は、

「瑠夏はママと似ているから、気持ちすごくわかるよ。でも、いつもがんばり過ぎ。何でも全部一人でかかえこまないで、もう少し誰かに頼って肩の荷、おろしたら？」

と言ってくれました。さらに、

「ママは気付いてたよ。」

と一言。あえて私に「大丈夫？」という言葉をかけなかったと――。

母に言われて初めて気が付いた自分の気持ちや性格。今まで変なプライドに憑りつかれ、自分自身を苦しめていたこと。

それからは、“無理にやろうとしない。がんばらない。”と決めました。「がんばらない。」私にはこれくらいの言葉がちょうどいいと思います。

私はこの経験を通して、「誰かを愛すること」と同じくらい、「自分を愛すること」が大切だと知りました。母と話して改めて感じた「愛されている」ということ。自分を愛することは簡単なことではないかもしれません。短所やコンプレックスは誰にでもあると思います。そんな自分を認め、自分と向き合い、心の声に目を向けて、自分自身を大切にすれば、少しは自信をもてるのではないでしょうか。そうすれば、人生をもっと楽しく、充実したものにできると思います。

私はまだ、自分の愛し方を学んでいるところです。いろんな経験を通して、少しずつ自分に自信をもって、私らしい人生にしていきたいです。

自信をもつために大切なのは、自分を愛すること。今、自分に自信がなくて、つらいことがあっても、きっと愛してくれている人はすぐそばにいるはず。だから――。私は自分を愛していく！

奨励賞

一歩手前にあるもの

新得町立新得中学校３年
桒野（くわの）　結衣（ゆい）

「まただめだった。皆、心の中で笑っているんだろう。最悪の演奏だと、視線がそう言っている。あーもう！何をしても最後は笑われるのか。早くこの場から逃げたい。早く遠くへ。」

ピアノの発表会。弾き始めてすぐに、そんな考えが頭をいっぱいにする。後悔しない道を選んで、こうなってしまうのか。

今から話す内容は、私の失敗談。でも、ただの失敗談ではない。見のがしやすい大切なことに、気がつける話だ。失敗して思い出したくない記憶を持っている人に、特に聞いてほしい。新しい考え方に出会えるかもしれない。

発表会四ヶ月前。曲決めをすることになった。数曲の中で、ある一曲だけが自分の中で響き渡った。時が止まり、遠雷が落ちたかのようであった。自分のための曲といっても過言ではなかった。先生は、

「少し難しいと思う。」

と、おっしゃった。そんなことは気にならなかった。ただ、この曲を弾きたいという気持ちが勝った。そして、練習を始めた。現実を見た。難しかった。そんな簡単にいく訳がなかった。うまく表現できなくて、たくさん注意された。弾きたくなくなることもあった。それでも弾き続けたのは、大好きな曲を自分の色で染めたいという気持ちがあるからだった。

発表会前日の最終確認。気分は恐怖という色一色で塗り潰されていた。一年前に失敗したトラウマがよみがえっていたのだ。多くの冷たい目が一斉にこちらを見る。そんな記憶が頭をかけめくっていることを先生に伝えると、思いがけない言葉が返ってきた。

「緊張してどうしてもだめなら、最初の部分を弾かなくていい。」

私は、逃げ道があることに安心した。が、同時に虚しさも覚えた。

本番。私は弾くという選択をした。恐怖にうち勝った訳でもない。ただ、「弾けば良かった」なんて後からは後悔するなんてそんなの考えられなかった。

ステージに立った。弾き始めてすぐに、その場から逃げたいという衝動に駆られた。

「ミスタッチ。またミスタッチ。失敗の連続。あんなに練習したのに、またこの結果。一秒でも早く逃げたい。」

そんな思いが私を飲み込んでいった。

発表会が終わり、次の週のレッスン。先生から思いもよらない言葉がかえってきた。

「おつかれ様！最初の部分は失敗してしまったけれど、その後しっかり立て直せていてすごく良かったよ。」

と、言ってくださったのだ。しかし、自分の中でふに落ちていなかった。そんな様子を見て、先生は、

「そんなに落ち込む必要はないでしょ？もともと難しい曲だったし、発表会では最初の部分にもチャレンジしたじゃない。」

と、私に喝をいれた。その瞬間、何かが自分の中で変わった。それと同時に、今までにない物事の考え方と深い感謝の気持ちが心の奥底から湧き上がった。その正体は挑戦した自分を認めるという考え、物事を最初だけではなく最後まで見守ってくれる先生への感謝であった。

私はこれを機に、失敗しても結果だけにとらわれないようにしている。物事の大事なところは、成功したかどうかの一歩手前にあるのだ。どんな結果でも最後まで見守ってくれる人がいるということ。難しいことに挑戦し、努力を重ねることができるということ。そして、どんな状況にあっても最後までやりきるということ。それが大事なのではないかと思う。

奨励賞

ぼくの見える世界

別海町立上春別中学校３年
荒井（あらい）　響稀（ひびき）

みなさんには、世界の色がどのように見えていますか。

例えば、信号機の色。「赤」・「黄色」・「青」に見えていますか。

でも、僕は違います。

僕には、「青」・「黄色」・「緑」に見えています。他にも、「紫」と「青」の区別や、「黄色」と「緑」の区別もつきません。

僕がこんなに色の区別がつきづらいのは、「色覚障害」という病気だからです。

「色覚障害」とは、正常とされる他大勢の人とは、色が異なって見えてしまう病気のことです。

僕が、この病気のことを知ったのは、昨年の八月のことでした。それまでは、「自分は目が悪いのかな。」程度にしか考えていませんでした。

そして、僕は「僕の見える世界」がずっと嫌でした。なぜなら「僕の見える世界」のせいで、いやな思いをすることがたびたびあったからです。

保育園の頃、色塗りなどの時間の時に色が見えづらいため、「黄色」と「緑色」を間違えてしまい、友達に笑われたことがあります。

お遊戯会の練習の時には、立ち位置の目印が「灰色」のシールだったのですが、僕は「灰色」が一体、どのような色なのかが分からず、困ってしまったことがあります。

さらに、僕が困っていることを知らない先生からは、「見えるでしょ！」と言われ、ショックを受けました。

他にも、「色鬼」という遊びをした時には自分が「黄色」だと思って触れていた場所が、実は、「緑」で鬼にタッチされたり、逆に、僕が鬼になった時には、自分が指定した色がその場にないこともありました。

そのような事があったため、僕は友達に笑われたり、先生に怒られたりしたのが、とても嫌で、悲しかったです。

小学校に入学してからも、黒板に書かれた赤いチョークの字が全く見えなかったり、部活動や少年団でも困ってしまうこともたくさんありました。

そんな日々を送っていた僕でしたが、あることがきっかけで、自分の病気に対する思いが変わりました。

それは、幼いころから仲が良かった友達の一言でした。

ある日、僕はその友達に、色が見えにくくて、悩んでいることを初めて打ち明けました。

すると、話を聞いてくれた友達は、「そんなこと気にしなくていいよ。人によって見え方が違うのは当たり前じゃん。それに、みんなの見え方が違うのは個性があるからだよ。だから、響稀のその見え方も響稀の個性なんだよ‼」と温かい言葉をくれたのです。

その言葉に僕は、心から勇気づけられ、自分の見える世界に対する思いが大きく変わりました。

「僕の見える世界は、僕にしか見えない世界なんだ。」

友達の一言によって、僕は「ぼくの見える世界は、自分の個性だ」と考えられるようになったのです。

さらに、自分と違う考え方を持っている人に対しても、その人にはその人の「世界の見え方があり、それはその人の「個性だ」と考えられるようになったのです。

人は、みんな「個性」をもっています。

なので、みなさんにも、たとえ自分と違う考え方をもっている人がいても、その人の考え方を尊重してほしいのです。個性を尊重することが、差別や偏見をこの世からなくす第一歩となり、結果として、その人の成長にもつながります。

あなたの見える世界には、どんな個性がありますか。

奨励賞

誰にでも起こりうること

札幌市立厚別南中学校３年
寒（かん）　爽一（そういち）

とても信頼していた塾の先生が、中学一年の冬休み、急に倒れてしまいました。その後、体調不良から回復できず、退職してしまいました。

後からわかったことですが、その先生は一人で、ほぼ全ての科目と学年の授業、授業中の電話対応、終業後の雑務、生徒全ての月謝計算などをこなしていたそうです。

授業の担当が人気のある先生に殺到することはわかりますが、授業以外のことは、他の人でも良いはずです。

一人に、全て仕事が集中するのは、おかしいと私は思いました。

その先生が辞めてしまった後、他の職員の方々は、何がどうなっているのかわかっていない状況で、後始末に翻弄されていました。

なぜ、そのようなことが起きたのだろう。

私は疑問に思いながらも、どこか遠い世界のこととして考えていました。

ところが、今年度早々に私は所属している生徒会で、似たような経験をすることになったのです。

コロナ禍で、行事や決定事項が頻繁に変わる中、突然、一分野の仕事が全て私一人に任されることになったのです。それは、撮影した動画の編集でした。仕事の量や、内容から考えても、とても、未経験である私一人では、始めから終わりまでできるようなものではありませんでした。

始めは、急な押しつけに腹が立って、相手と言い争いになったりもしました。でも考えてみれば、私を含め多くのメンバーが、今まで、今後の予定について関心をもっていませんでした。

だから、一人の言うことに、他のメンバーが従うばかりで、「いつも急に押しつけられる」という感覚になってしまっていたのです。

内容や状況を十分に理解しないまま、何でも引き受けてばかりでは、自分が限界のときに組織が混乱してしまうのは目に見えています。

これを回避するためには、自分には何ができて、何を苦手とするのか伝え合い、次の計画に向けて何をするのか話し合い、自分の得意分野は積極的に引き受け、他の人の方が得意なことは任せてみる。そして、お互いの進捗状況を伝え合う。また時には、たとえ自分の苦手な仕事でも、いざという時に手伝うことができるように、最低限の情報は共有し、自分のやっている仕事以外にも関心をもつことが大切だと思います。

また、後輩や仲間にも、突然任されて困らないように日頃から仕事を教えておくべきだとも思います。

今まで私は、頼まれた仕事をして、終わったら帰る、という風に、自分のことだけを、自分のペースでやっていました。でもそれでは、仲間内で連携がとれていないので、様々な状況に、臨機応変な対応をとることは、確かに、難しいことです。

コロナ禍で、急な変更や、新しい取り組みを考えることはあらゆる場面で必要となってきます。その際に、一人だけが負担にならないように、組織全体が状況に瞬時に対応できるようにしていきたいです。

三密を避けて、連携は密に。

塾の先生のようなことや、僕に起きたようなことは、誰にでも起こりうることだから。

今から思えば塾の先生も、責任感から、引き受けたものは全て、自力で解決しなくてはならない、と思っていたのかもしれません。

でも他の仲間もいたはずで、自分が限界を感じたら代わりが効く場面では、他の人に手伝いを頼んでもよかったのではないかと思います。

他の仕事仲間も、一人の先生に集中していると感じたら、自分にもできる範囲の仕事は分担してあげるという姿勢があれば、先生が倒れることはなかったのではないかと思います。

私もこれからの学校生活で、仲間内の連携をより「密」なものに、改善しようと思います。

奨励賞

理解してほしいジェンダーのこと

札幌市立篠路西中学校３年
平山（ひらやま）　來夢（らいむ）

「ある男性が、女子トイレを利用しようとしています。」このような場面が自分の目の前で起こったとき、みなさんならどうしますか。周りを見ている人はきっとざわつくと考えられます。「ここは女子トイレですよ。どのようなつもりですか。」と強く声をかけてくる方もいると思います。僕なら変に見つめてしまい、声を出すことはできないと思います。そして、「こういう人もいるんだなあ。」と、気分が下がってしまうと思います。

では、この「男性」はどのようなつもりだったのでしょうか。この男性が、もし「トランスジェンダー」と呼ばれる、心と体の性が合っていない方で、このことについて周りの人から認めてもらっていると仮定すると、この男性は何の意識もなく女子トイレに当たり前のように入っていくのです。しかし、周りから注目をされ、声をかけられてしまう。お互いに悪気はないはずなのに、こういった残念なことが起きてしまうのです。

このような「性」についての問題は世界でも注目をされ、SDGｓの５番目に「ジェンダー平等を実現しよう」と述べられています。2030年、つまり、あと９年で達成すべき問題の目標の一つに含まれているのです。

では、実際にどのような変化が起こるのでしょうか。

「Ladies and Gentlemen」というと、飛行機のフライト中や空港のアナウンスなどでお馴染みのフレーズで、実際に聞いたことがない人でも、耳にしたことはあると思います。そして、飛行機のアナウンス＝これだとイメージをもつ人もいるのではないでしょうか。しかし、このアナウンスでは、男性・女性と区別していることから、問題視され、2020年10月１日に「日本航空（JAL）」は、この英語のアナウンスを廃止しました。そしてジェンダーレスの観点から「Good morning everyone」などの語に変更されたのです。そして、「エア・カナダ」を始めとする世界の航空会社でも、「Ladies and Gentlemen」の廃止や変更が始められています。

また、地面に埋まっている「マンホール」という呼び名についてもアメリカでは議論されています。「マンホール」というのは「マン」と、穴を指す「ホール」が合体して言葉で、「マン」というのは男性女性を問わず、「人」を指すこともあるのですが、男性を指すことから問題視され、「メンテナンスホール」という新たな呼び方が考え出されました。また、人間の労働力などを表す「マンパワー」が、人の努力を表す「ヒューマンエフォート」へ呼び方が変わったり、労働力を表す「ワークフォース」への言い換えが求められるようになってきました。

そして、将来的には、人称代名詞である「彼」を指す「he」、「彼女」を指す「she」が使えなくなるかもしれません。

これは、heやsheと男性・女性の二種類の性に当てはまらない性の多様性に対応するためです。人称代名詞であるheやsheを使うことで、文章中の男性・女性を明確にしていますが、使わないことで男性・女性と性を限定しないようにしています。なので、人称代名詞は、性を限定しない「they」という単語が使われていくと思います。

しかし、我々中学生は、このようなことは習っていません。僕は、このような問題を、もっと授業で積極的に取り扱うべきだと思います。日本の言語ではないものの、SDGsの問題の一つに含まれている目標達成の一歩目を我々が踏み出しても良いのではないでしょうか。

では、日本語では、どのような変化があるのでしょうか。それは「くん」や「ちゃん」が「さん」という呼び名に統一されるというものです。ですが、「〇〇さん」と呼ぶのはほんとうに良いのでしょうか。なぜなら、あだ名があるからです。あだ名は人の名前を呼びやすくすることや、人の名前の一部をとって「何々ちゃん」とするなど、あだ名はいろいろありますが、あだ名をつけ合うことでその人との距離がぐっと縮まります。このような身近な問題に置き換えたとき、heやsheの問題の大きさというのにも改めて気づかされます。

また、僕は「少年の主張」というのも少し違うように思います。「少年」という語は子どもを指しているようにも思えますが、「少年」の対義語は「少女」、つまり「少年」から男の子という印象を少なからず受け取ってしまうからです。タイトルが「少年の主張」である意味を目的から読み取ることができなかったので、「少年の主張」というのは少し違うように僕は思います。

このような性の問題を知れば知るほど、「性別なんてなくていいのに。」と感じます。この性別についての問題は、傷つけるつもりがなくても傷つけてしまうなど、最初のトイレの例からも感じてしまいます。

ですが、いつもなくていいものでもありません。男女でトイレは一緒にはできませんし、子どもの頃に大人にわいせつ行為をされた人なら、怖くてたまらないですし、そういったものも増えてきてしまうと思います。

なので、僕は「目標を明確にする」ということが大切になっていくと思います。性別という問題の壁を、壊してもいいようにも思えますが、壊しすぎてもいけません。なので、目標、目的、理由を明確にし、広く様々な人へ伝えていくべきだと思います。

LGBTの方はこれまで逃げるから辛くなり、辛くなるから逃げてしまい、向き合ったとしてもその環境に押しつぶされて、また逃げてしまうなどといった悪循環があったと思います。

今は、納得はできなくとも、少なからず理解はするべきだと思います。なぜなら、私たちは男女である前に、人間だからです。

講評　審査員長　坂本　征人　北海道中学校長会対策部幹事（妹背牛町立妹背牛中学校長）

全体講評

昨年度は、新型コロナウィルス感染症の影響により、「少年の主張」全道大会は開催されませんでした。今なおコロナ禍の状況で尽力されている、医療・福祉分野で働いている方々や、ライフラインを維持し社会生活を支えているすべての方々に感謝とエールを送るとともに、中学生の皆さんも各学校や家庭で、そして地域の方々もそれぞれ感染予防に努めていることに感謝申し上げます。今年度は、ビデオ審査とはなりましたが、こうして発表の場をいただけることになりました。

各地区から選ばれた16名の皆さんの主張は、何度も原稿を推敲し、何度も何度も発表の練習をしてきたことと思います。論旨はもとより、論調も含め、それぞれの個性が光る素晴らしいもので、ビデオからもその熱意がしっかりと伝わってきました

皆さんの発表は、自信の悩みや経験したこと、言葉など日常生活での気づきや疑問、思いを切り口にしたものから、ヘイトクライムやジェンダー等と社会問題まで幅広い題材の主張で、それぞれの題材に対して、自分自身の気持ちや生き方、思いを自分の言葉で伝える力強いものでした。

そしてそれらはすべて、今の時代を生きる私達に課せられた課題であり、これからの時代を生き合う中学生の皆さんが対応していくだろう課題でもあり、審査員の一人として、教育をつかさどる一人として改めてその内容について考えさせられましたし、皆さんの主張を読まれた方も同様に感じたことと思います。皆さんの心から発信されるメッセージは多くの人の心を打つものだと思います。

さて、審査についてですが、論旨と論調の2つの観点から5名の審査員で審査をいたしました。結果につきましては、この作品集に掲載されているとおりですが、どの主張も素晴らしく、審査員一同悩みに悩みました。その中でも最優秀賞を受賞された、洞爺湖町立洞爺湖中学校の吉野真帆さんの主張は、自身の経験の気づきから、社会的な気づきへとひろがり、構成がしっかりとしており、論調も説得力のある話し方で、主張の内容が共感を与えるものでありました。

優秀賞の3名の皆さんにつきましては、最優秀賞とは僅差であり、奨励賞になった12名の皆さんも、心に残る素晴らしい主張でした。各地区を代表して出場している皆さんは、自分の主張を伝える論調に目を見張るものがあり、今後、様々な場面での活躍を期待しております。

最後になりますが、本大会参加に向けて熱心に指導された先生方、温かく励ましてくださったご家族の皆様、大会開催にご尽力いただいた北海道青少年育成協会の皆様、そしてこの大会に携わっていただいたすべての皆様に心から感謝を申し上げるとともに、今回参加していただいたすべての中学生の皆さんのご活躍とご健康を祈念し、全体講評といたします。

個人講評

1　谷　　和珠 さん　　テーマ「あつかったら　ぬげばいい　ー絵本が教えてくれたこと」

何事もうまくいかず、毎日を過ごしているうちに自分の殻に閉じこもり、孤独を感じて行く様子と、父親が与えてくれた一冊の絵本によって救われた様子が丁寧にまとめられていました。「自分は独りではない」にあるように、誰かが誰かを見守っているからこそ、一歩を踏み出し、前に進んでいくことができる。みんなの背中を押してくれるような主張でした。

2　楠田　理子 さん　　テーマ「ヘイトクライムと差別」

報道をきっかけに関心を持ち、自ら調べ、自分の意見としてしっかりとまとめられた主張でした。「ヘイトクライム」という社会問題を、「いじめ」という身近なことに置き換えた論旨を展開し、「みんなちがって　みんないい」、一人ひとりが唯一無二の存在で、「ダイバーシティーとインクルージョン」（多様性と受容）が大切だということが伝わってきました。

3　土屋　結愛 さん　　テーマ「優しさを繋ぐ」

旅行先でたくさんの優しさに触れた体験から、優しさを繋ぐ「恩送り」を広げることで、それがたとえ、ささやかな小さな行動であっても、世の中に温かなそよ風を吹かせ、誰かの大きな力になることが伝わってきました。たしかに親切にすることは気恥ずかしく、難しいことのように思いますが、世の中を見渡すと、ちょっとした優しさにあふれているのではないかと感じさせる主張文でした。

4　吉野　真帆 さん　　テーマ「完璧じゃなくていい」

「ごめんね。ごめんなさい。」私達は日常誰かに何かしてもらったら使っている言葉。その背景には相手に迷惑をかけているというという申し訳ない気持ちがあるからだろう。しかし誰もが完璧ではないので、助け合い、支え合いながら生活しています。優しさとそれに気づく「ありがとう」の言葉がもっと広がると、インクルーシブな世の中に近づいていくことを感じる主張でした。

5　設楽　　幸 さん　　テーマ「言葉で変わる人のこころ」

「自由でいいんだよ」「楽しんでおいで」先生の絶妙なタイミングと、これまでの設楽さんを見守ってきたからこそ出てきた言葉から、コンクールでの入賞、そして自分に自信が持てるようになった経験をもとに主張が展開されていました。言葉は思いを伝える手段であり、人のこころを変えてしまうほどの大きな力を持っているからこそ、大切にしなければならないことが伝わってきました。

6　三好　陸翔 さん　　テーマ「違いを楽しむ心をもて」

自信のなさ、インターネットの普及などから、同調傾向と承認欲求が強くなる。中学生でそれに気づくとは驚きました。自分のものさしをつくること、「諸君狂いたまえ」の意味から「流交」の提起と、自信の価値の構築とその交流から学びが深まることが伝わってきました。不安が広がっている今の世の中だからこそ、違いを受け入れることが大切なことだと感じました。

7　平田　咲輝 さん　　テーマ「対立しても」

心の余裕の差から生じる「感情の対立」と「意見の対立」。前者は否定されていると感じ、相手を受け入れることはできないが、後者は相手の意見を受け入れることで、新たな考えや方法が見つかるかもしれない。自身のこととなると難しいかもしれませんが、一呼吸おいて対応することで、お互いを尊重し、心の対立とならないとする決意が伝わってくる主張でした。

8　佐藤　莉子 さん　　テーマ「今を生きる私達へ」

冒頭の新しい学校の生活様式が表現された文章から、新型コロナウィルスによって当たり前の日常が奪われたことを感じました。実際に経験したこと、実践したことを中心に論旨が展開され、今の時代を前向きに捉え、とても微細なものによる恐怖という怪物に飲み込まれない頼もしさを感じる主張で、これからもこの状況に立ち向かっていく決意を感じました。

9　多田　莉世 さん　　テーマ「努力で得られるものとは」

努力を続ける多田さんの成長が目に浮かぶような主張でした。「努力は目標に向かって練習、勉強を続けていき、自分自身と戦い続けること」とあります。自分の限界を感じたり、思うような結果が出ずに挫けてしまったりすると諦めてしまい、努力をやめてしまいがちです。そんな自分との戦いを続けていく末に見つける「何か」はとても尊いものだと感じました。

10　三浦　瑠夏 さん　　テーマ「自信をもつために」

何事も完璧に、自分を追い込んでしまう多田さんが、母親に気持ちを打ち明けた時、母親の言葉から気づいた自分を大切にすること。家族は最高のアドバイザーですね。「愛されている」と感じたからこそ、自分自身のすべてを認め、自分を愛することができる、大切な存在だと気づくことができる。それが自信を持たせてくれる力の源であることが伝わる主張文でした。

11　中山　芽依 さん　　テーマ「すべての個性が輝くために」

「個性とは、星のようなものだと思う。」冒頭の素敵な文章に心を奪われました。この輝きを失わせてしまう差別。命の重さはみんな一緒だからこそ、個性を認め会うことが大切であると一貫した論旨で、力強い論調の主張でした。長い年月がかかったとしても、互いの個性を認め合うことができる「多様性のある社会」の実現に向けて、決意が伝わってきました。

12　桑野　結衣 さん　　テーマ「一歩手前にあるもの」

「失敗は成功のもと」の言葉があるように、失敗から気づくことは多い。その気づきがないと大切な何かを見逃してしまう。桑野さんは見守っている指導者の存在から挑戦できることに気づきました。また、結果は必ず出る、その受け止めと、自らの取組すべてを自分の成果とすることで、次に挑戦できることにも気づきました。これからもあきらめずに努力を続けていく決意が伝わる主張文でした。

13　伊藤　琉希 さん　　テーマ「いじめのない未来へ」

小学校の頃に経験した、転校生から打ち明けられた「いじめ」の様子。自分とは関係のない出来事だと思っていた「いじめ」が急に身近なことに感じ、改めて「いじめ」が非常に悪質なものと認識します。そして、そばにいることや、話を聞くことだけでも、誰かの役に立っていることにも気づきます。「いじめ」が社会問題となって30余年、いまだに解決できないこの「いじめ」に立ち向かう強い決意を感じました。

14　荒井　響稀 さん　　テーマ「ぼくの見える世界」

自分の特性から、保育園、小学校と嫌な思い、悲しい思いをしてきた荒井さんが、友達の「見えかたが違うのは当たり前」の言葉から、個性ととらえるようになり、自分の個性と相手の個性を尊重する、多様性の大切さに気づきました。自分と違うからといって、差別や偏見を持つのではなく、各々の個性として尊重することが大切であることが伝わる主張文でした。

15　寒　　爽一 さん　　テーマ「誰にでも起こりうること」

「働き方改革」やコロナ禍による対応など、一般社会にも通ずる主張文で、興味をもって読み進めることができました。組織の中であっても、各々が自分の範疇と思っている仕事だけを独りで行うと、問題が生じたときに滞ってしまう。みんなで協働し、連携を取り合うことが大切だと伝わってくる主張文でした。私たち大人も中学生も、組織の中で活動する上で大切なことは同じなのだと改めて感じました。

16　平山　來夢 さん　　テーマ「理解してほしいジェンダーのこと」

冒頭「どきっ」としましたが、ジェンダーに関する問題提起だと感じることができました。ジェンダーレスの観点から数点の事例をあげ、生物学的な性別（体の性別）と心の性別との問題は解決が非常に難しいことです。性の問題で悩み苦しんでいる人がいることを理解し、男女である前に人間であり、人としての尊厳が大切であることが伝わってくる主張文でした。

参考

令和３年度「第43回少年の主張全国大会～わたしの主張2021～」
内閣総理大臣賞受賞作品

認め合うことの大切さ

岐阜県　養老町立高田中学校３年
細川（ほそかわ）　土禾（とわ）

みなさん、もしあなたが、片腕のない人を見かけたら、どうしますか。声をかけますか。それとも、かけませんか。もし、あなたがお子さんと一緒にいるときならどうですか。「見ちゃだめだよ。」そんな声をかけますか。

僕の妹には、生まれつき片腕がありません。そのことで、妹はたくさんの辛い思いをしてきました。

―「あの子、手がないよ。」

今年の春、妹がある女の子から言われた一言です。妹は、どうしていいか分からないと、戸惑いと悲しみの表情を浮かべ、僕たち家族の前でわんわんと泣いていました。その姿は今でも僕の目に焼き付いています。それを見た母も、本当に苦しそうでした。まるで何もしてあげられない自分を責めるかのように、ただ泣いていました。そのときのことを思うと、胸がぎゅっと締め付けられます。ただ、みなさんに知ってほしいことは、妹は、このような経験を何度もしてきたということです。

そうした中、僕は自然と考えるようになっていました。もし、自分が、逆の立場だったらどうするのだろうと。妹と同じように、片腕がない人がいたら、足がない人がいたら…、僕はどうするのだろうと。

きっと、「見てしまう」と思います。なぜでしょうか。答えは簡単です。「自分と違うから」です。時に、「違う」ことは、問題を引き起こす原因にもなり得ます。しかし、「違う」と認識すること、これは、差別なのでしょうか。そもそも今年の春、妹の手がないと言った女の子。彼女に、相手を苦しめようとする意志はあったのでしょうか。きっと答えは、「NO」です。

僕は思います！僕たちはいつからか、「差別をしないこと」＝「何もしないこと」、ひいては、「目を背けること」だと、大きな勘違いをしているのではないかと。冒頭で話した、「見ちゃダメだよ」という発言も、このような勘違いから生まれた言葉じゃないでしょうか。

違いを認識し、見て見ぬふりをすること、そして、何もしようとしないこと、これこそが、大きな問題だと、僕は思うのです。なぜなら、僕たち人間は、違いを知るからこそ、その先のことを考えることができるはずだからです。

それから僕は、妹にかける言葉が変わりました。

「見られるのは当たり前だよ。だってさ、自分と違うんだから。」聞いた妹は、少しきょとんとして、僕の顔を見つめていました。

僕も妹も母も、辛い経験を多くしてきましたが、考え方一つで、こんなに大きく傷付くことはなかったのかもしれません。相手は違いを認識しただけ。その先が何よりも大事です。僕たちも、もしかしたら、スタートラインに立っていなかったのかもしれません。

妹のおかげで、僕は大切なことに気付けたような気がします。差別とは、考えることをやめ、相手から目を背けることなのです。ですから、「見ちゃだめだよ。」に代表されるような言葉は、一見相手を思いやっているようにも見えますが、考える機会をただ奪うことにもつながりかねない、上辺だけの言葉なのです。ですから、僕たちは、まず、その人らしさを認め、違いを受け入れ、その上で、その人にとってどんな行動や考え方が必要なのかを考え、見つけ出していくことが、何よりも大切なのです。

妹がいてくれたからこそ、僕は目を背けず、考えることができました。

妹がいてくれたからこそ、僕は相手の気持ちを考え、行動することができました。

今の僕があるのは、まぎれもなく妹のおかげです。本当にありがとう。僕は、これからも、妹が、そして、全ての人が、心から笑っていられるように、目を背けず考え続けます。その先に、差別のない社会があると信じて。

資　料

大会のねらい

少子高齢化、国際化、情報化の急速な進展等、社会や環境が大きく変化する現代社会にあって、次代を担う少年には、心身ともに健康で他者を思いやる心をもち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力などを身につけることが大切であることから、少年が社会に向けての意見、未来への希望などを発表してもらう機会を設け、少年の健全育成及び非行防止に対する道民の理解を深める契機となることを目的としています。

（国際児童年の昭和54年から毎年開催）

大会のあらまし

■総合振興局・振興局地区大会　地区代表者の選出

■全　道　大　会　地区代表者16名のビデオ審査を実施
最優秀賞１名（北海道・東北ブロック代表選考に推薦）
優秀賞３名、奨励賞12名を決定・表彰
（最優秀賞・優秀賞の４名には、併せて「北海道コンサドーレ札幌賞」を贈呈）

■全国大会出場者の選出

全国５つのブロック（北海道・東北／関東・甲信越／中部・近畿／中国・四国／九州）毎に、都道府県代表者の主張原稿及び録音テープを審査し、各ブロックの代表者が選出される。

■全　国　大　会

令和３年11月１日～11月30日の期間、特設WEBページにおいて、各ブロックの代表者12名の主張発表動画を掲載し開催する。

審査結果（内閣総理大臣賞ほか各賞）は、令和３年11月14日（日）に特設WEBページにおいて発表される。

審査員

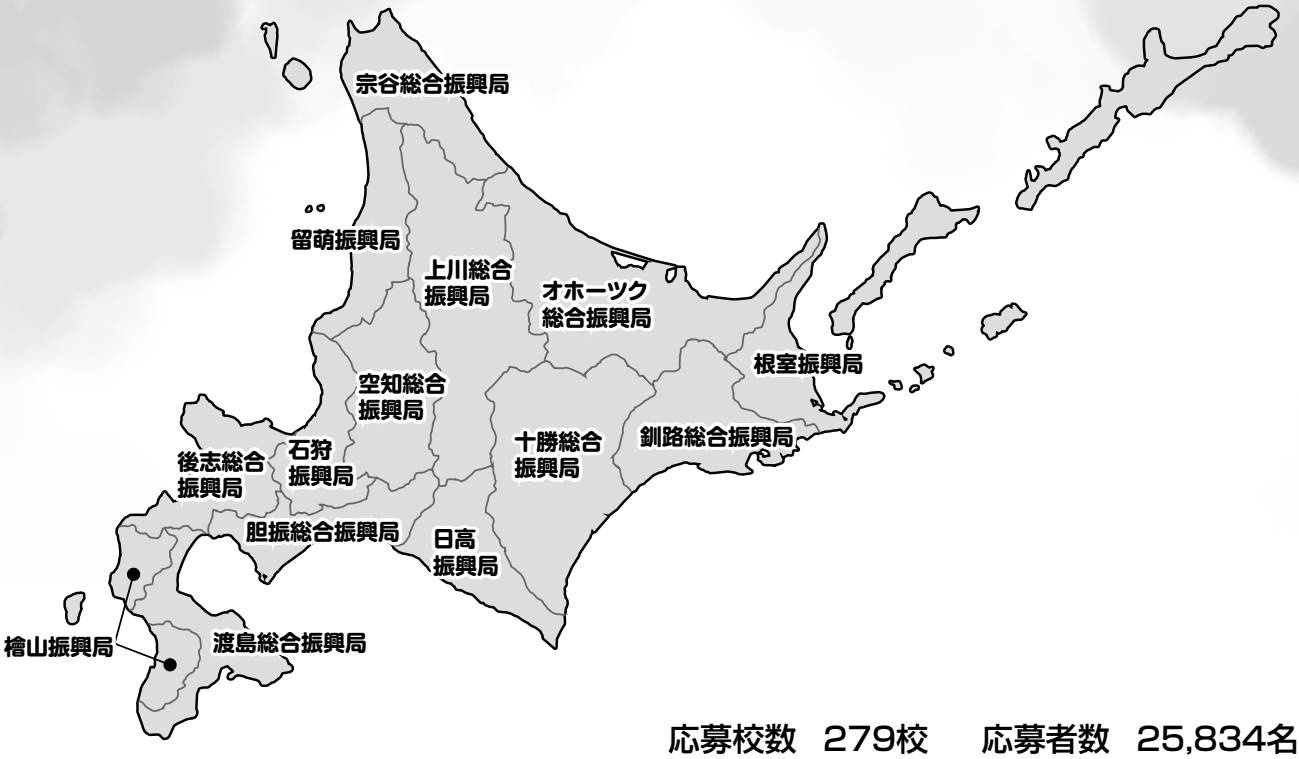
■審査員長

坂　本　征　人（北海道中学校長会対策部幹事／妹背牛町立妹背牛中学校長）

■審 査 員（50音順）

石　原　宏　治（公益財団法人北海道青少年育成協会理事／北海道新聞社編集局くらし報道部長）
出　村　好　孝（北海道ＰＴＡ連合会事務局次長）
長　岡　広　之（北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課長補佐）
西　田　陽一郎（北海道環境生活部くらし安全局道民生活課青少年担当課長）

令和３年度「少年の主張」総合振興局・振興局地区大会開催状況



応募校数　279校　　応募者数　25,834名

総合振興局・振興局名	開催日	開催場所	発表者（人）	審査委員（人）	聴取者等（人）
空知総合振興局	7月　9日(金)	空知総合振興局５階会議室	12	4	0
石狩振興局	7月15日(木)	道庁別館５階大会議室	7	4	0
後志総合振興局	7月21日(水)～30日(金)	各審査員の職場等において審査を実施	11	5	0
胆振総合振興局	7月16日(金)	胆振総合振興局３階会議室C	10	3	0
日高振興局	7月15日(木)	日高振興局２０１会議室	7	5	0
渡島総合振興局	6月29日(火)	渡島合同庁舎４０２号会議室	13	4	3
檜山振興局	6月22日(火)	上ノ国町総合福祉センタージョイ・じょぐら	16	5	1
上川総合振興局	7月16日(金)	上川合同庁舎３階講堂	18	4	8
留萌振興局	7月27日(火)	留萌合同庁舎２階講堂	8	5	0
宗谷総合振興局	7月16日(金)	宗谷合同庁舎大会議室	11	5	0
オホーツク総合振興局	7月　8日(木)	オホーツク合同庁舎３階３号会議室	5	3	0
十勝総合振興局	7月　9日(金)	十勝合同庁舎地下１階　地下Ｓ会議室	17	4	0
釧路総合振興局	7月26日(月)	釧路総合振興局３階会議室	8	5	0
根室振興局	7月15日(木)	中標津町役場３０１会議室	10	6	5
合　　計			153	62	17

※令和３年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、ビデオ審査による審査とし、聴取者を抑えて開催といたしました。

令和３年度「少年の主張」実施要領

１　目　的

少子高齢化、国際化、情報化の急速な進展等、社会や国際的な環境が大きく変化する現代社会にあって、次代を担う少年には、心身ともに健康で他者を思いやる心をもち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力などを身につけることが大切であることから、少年が社会に向けての意見、未来への希望などを発表する機会を設け、少年の健全育成及び非行防止に対する道民の理解を深める契機となることを目的とする。

２　主　催

北海道、公益財団法人北海道青少年育成協会、独立行政法人国立青少年教育振興機構

３　主　管

（総合）振興局地区大会は各（総合）振興局、全道大会は環境生活部とする。

４　対　象

北海道内に在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。

なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

５　名　称

少年の主張

６　実施方法等

（１）（総合）振興局地区大会

各（総合）振興局管内（札幌市を除く）の中学生を対象に意見を主張する場を設定する。

ア　実施方法

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、原則、ビデオ審査により実施する。

ただし、北海道警戒ステージ１に該当する場合は、地域事情を踏まえ大会の開催も可とする。

※詳細は別紙「令和３年度少年の主張（（総合）振興局地区大会・全道大会）における新型コロナウイルス感染症への対応について」を参照

イ　募集

・教育局の協力を得て、管内市町村教育委員会等を通じて、各学校に対し、周知を図る。

・各市町村単位、各学校単位で実施している主張大会、弁論大会等と連携した募集の他、自由公募などにより募集する。

・広報媒体を利用した募集に努める。

ウ　発表内容

・社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など

・家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友だちとの関わりなど

・テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など上記のような内容で、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを少年らしい自由でユニークな、飾り気のない言葉でまとめたもの。

※　商業的な固有名詞の使用は極力避けることとする。

※　パフォーマンスや小道具の使用を取り入れてもよい。

エ　発表時間

５分程度（400字詰原稿用紙４枚程度）

※全国大会の規定が、学校名、氏名、タイトル等の部分は除く「作文本文の出だし」から「作文本文の終わり」までで４分30秒～５分30秒であるため、（総合）振興局地区大会代表者の時間が範囲に入らない場合は、全道大会出場に向けて必ず時間調整を行ってください。

オ　ビデオの録画

・各学校等において、審査に使用するためのビデオをMP4形式で録画し、DVD-R等を利用して各（総合）振興局へ提出する。

・表情・パフォーマンス・音声を鮮明に確認できるよう撮影すること。正面、胸から上を録画することが望ましい。

・原則、（総合）振興局地区大会出場者のみを録画する。

・提出前に、各学校においてDVD-R等のウイルスチェックを実施すること。

カ　審査

・関係機関等に、選考に係る審査員の推薦を依頼する。

・審査により、順位付けし、最優秀者１名及び優秀者２名を決定する。

キ　審査基準

（ア）　論旨

・鋭い感性で、新鮮な主張であるか。（中学生らしさ）

・新しい情報や視点があるか。

・個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。

・提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。

・論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

（イ）　論調

・主張の内容が共感と感銘を与えているか。

・説得力ある話し方であったか。

・ 話し振りに熱意と迫力があるか。

ク　実施月（審査月）

原則として７月の「青少年の非行・被害防止道民総ぐるみ運動強調月間」に実施する。

ケ　表彰

・最優秀者１名及び優秀者等に対して賞状等を授与する。

・表彰に当たっては、賞状の他、副賞の授与、また、出場者数、地域の実情等に応じ、予算の範囲内で工夫して差し支えないこと。

コ　推薦

最優秀者を全道大会出場者として、令和３年（2021年）８月６日（金）までに、環境生活部に推薦するともに、最優秀者のビデオを提出する。

サ　その他

別添の地区大会実施要領案を適宜変更して要領を定める。

（２）　全道大会

（総合）振興局からの推薦者各１名及び札幌市中学校長会からの推薦者２名を対象に審査を実施し、最優秀者及び優秀者３名を選考する。

また、全道大会参加者の主張を発表する場を設定する。

ア　審査・選考

審査は、関係機関等から推薦された審査員が発表原稿及びビデオをもとに実施する。

ビデオは、（総合）振興局地区大会最優秀者14名については同大会で使用したビデオ（全道大会用に撮り直したものを含む。）を用いる。

札幌市代表者２名については、全道大会用に学校等において録画したビデオを用いる。録画に係る注意事項は（総合）振興局地区大会と同様とする。

審査基準は、（総合）振興局地区大会と同様とする。

審査により順位付けし、最優秀者及び優秀者（以下、「入賞者」という。）を選考する。

イ　発表

令和３年度北海道青少年育成大会（Web開催）において、全道大会参加者の主張の上映をもって主張を発表する場とする。

ウ　表彰

入賞者には賞状及び副賞を授与し、入賞者以外の審査対象者には奨励賞を贈呈する。

エ　全国大会への推薦

全道大会最優秀者を全国大会出場候補者として、独立行政法人国立青少年教育振興機構に推薦する。最優秀者が全国大会に出場できない場合は、優秀者のうち次位の者を推薦する。

７　その他

・主張発表者の原稿は400字詰原稿用紙（Ａ４）縦書きで、本人自筆による原本（障がい等による場合はワープロ可）とする。

※全道大会出場者については、Ａ４サイズ以外の原稿では出場できません。異なるサイズの場合は、Ａ４サイズに書き直した原稿が必要となりますので、ご留意ください。

・ 応募作品は、未発表のものに限る。

・ 応募された作品は、原則返却しないこととし、北海道に帰属するものとする。

・ 原稿の書き出しについては次のとおりとする。

１行目	タイトル
２行目	北海道　学校　学年
３行目	氏名
４行目	作文
	～

「少年の主張」全道大会　歴代最優秀賞並び優秀賞受賞者名簿

年度	最優秀賞（北海道知事賞）		全国大会	優秀賞（北海道教育委員会教育長賞、北海道PTA連合会会長賞、北海道青少年育成協会会長賞 H22～）			
	学校名	氏　名		学校名	氏　名	学校名	氏　名
S54	利尻町立沓形中学校	池原広文	出　場 総務長官賞				
S55	根室市立光洋中学校	小林優美	出　場				
S56	様似町立様似中学校	川上美穂子					
S57	初山別村立豊岬中学校	高橋未央	出　場				
S58	鹿追町立鹿追中学校	最上佐緒里					
S59	厚沢部町立厚沢部中学校	後藤　晃					
S60	和寒町立和寒中学校	高岡智扇		札幌市立手稲東中学校	庄田香織	更別村立更別中央中学校	西川朋憲
S61	小平町立達布中学校	紅屋　優		美唄市立美唄中学校	堀川卓郎	稚内市立稚内南中学校	山崎直美
S62	鵡川町立鵡川中学校	伊藤奈美	出　場	音更町立音更中学校	佐々木詩津子	和寒町立和寒中学校	岡本百里
S63	砂川市立豊沼中学校	小林まるみ		増毛町立増毛第二中学校	上坂奈緒美	更別村立更別中央中学校	竹川　暢
H 1	江差町立江差中学校	中川昌子		釧路市立鳥取西中学校	薄井理砂	別海町立中西別中学校	臼井貴之
H 2	鹿追町立瓜幕中学校	高橋恵美子		旭川市立広陵中学校	三浦愛子	初山別村立有明中学校	新田千佳子
H 3	稚内市立稚内東中学校	森田　淳		中札内村立中札内中学校	中西志香	美幌町立美幌中学校	飯島紀子
H 4	弟子屈町立弟子屈中学校	横川　心	出　場 文部大臣賞	白老町立虎杖中学校	中村有希子	江別市立江北中学校	藤城正興
H 5	生田原町立生田原中学校	仁木利沙子		浦河町立浦河第一中学校	高田牧生	別海町立中西別中学校	林　美穂
H 6	生田原町立生田原中学校	前島由衣	出　場	旭川市立六合中学校	中村沙織	余市町立西中学校	高山仁美
H 7	幕別町立糠内中学校	中村郁洋	出　場	標茶町立磯分内中学校	岡崎奈未子	札幌市立新陵中学校	出林裕佳
H 8	滝川市立明苑中学校	紺野友里子	出　場	標茶町立磯分内中学校	藤本智子	富良野市立山部中学校	寺井正美
H 9	中標津町立広陵中学校	谷口麻衣		七飯町立大中山中学校	竹安玄太	苫前町立古丹別中学校	中嶋卓広
H10	本別町立勇足中学校	岡本あすか		札幌市立北都中学校	野原　梓	天塩町立啓徳中学校	大岩奈々恵
H11	根室市立柏陵中学校	分部史織		江差町立江差中学校	柴田　優	中富良野町立中富良野中学校	杉原　咲
H12	稚内市立宗谷中学校	熊谷慶子	出　場	釧路市立北中学校	大井里紗	北広島市立西部中学校	畠山直子
H13	新冠町立新冠中学校	中村みなみ		虻田町立虻田中学校	佐々木千恵	猿払村立拓心中学校	藤井美咲
H14	共和町立共和中学校	本間絵美		釧路市立武佐中学校	佐藤くる美	恵山町立東光中学校	佐藤亜未
H15	釧路市立美原中学校	佐藤妃奈		岩見沢市立上幌向中学校	森谷紀治	歌登町立志美宇丹中学校	渡辺のぞみ
H16	熊石町立熊石第二中学校	山脇恭子		上富良野町立東中中学校	熊谷佳苗	鶴居村立鶴居中学校	木村友紀
H17	新十津川町立新十津川中学校	三吉莉湖		歌登町立歌登中学校	金子佳美	せたな町立大成中学校	正村早紀
H18	北斗市立石別中学校	山田亮一	出　場	岩内町立岩内第一中学校	松山亜莉紗	枝幸町立志美宇丹中学校	渡辺ともみ
H19	枝幸町立志美宇丹中学校	渡辺ともみ		当別町立西当別中学校	萩原有希	伊達市立長和中学校	本田舞音
H20	岩内町立岩内第一中学校	熊野遥華		幌延町立問寒別中学校	佐藤慎之介	池田町立池田中学校	新居詩穂
H21	寿都町立寿都中学校	石王凱騎		礼文町立香深中学校	中島佳奈子	千歳市立富丘中学校	中田翔哉
H22	遠軽町立生田原中学校	阿部　愛		北海道教育大学付属釧路中学校	恒川礼奈	増毛町立増毛中学校	加藤修人
				帯広市立清川中学校	横山くるみ		
H23	別海町立中西別中学校	盛合　樹		苫前町立古丹別中学校	永井星奈	釧路市立幣舞中学校	田名部あゆみ
				栗山町立栗山中学校	濱谷珠美		
H24	猿払村立拓心中学校	熊谷春奈		厚岸町立真龍中学校	山田　唯	札幌市立月寒中学校	安田りな
				遠別町立遠別中学校	丸山美月		
H25	帯広市立川西中学校	畠山優輝		札幌市立平岡中央中学校	高野大河	釧路市立鳥取西中学校	米内貴志
				江別市立江別第二中学校	最知なるみ		
H26	稚内市立稚内南中学校	熊谷七海		釧路町立富原中学校	山岸永和	帯広市立帯広第五中学校	深町陽奈
				鷹栖町立鷹栖中学校	高木倖凪		
H27	北海道教育大学附属札幌中学校	前田ほの香		千歳市立勇舞中学校	山田萌未	帯広市立川西中学校	西野侑未
				苫小牧市立緑陵中学校	吉岡美月		
H28	白糠町立庶路中学校	松橋愛美		豊富町立豊富中学校	伊藤佑茉	標津町立標津中学校	上田礼芽
				長沼町立長沼中学校	倉田友美		
H29	白糠町立白糠中学校	阿部はるか		芦別市立啓成中学校	渡部胡桃	旭川市立神居東中学校	若林千夏
				新ひだか町立静内第三中学校	坂本安侑子		
H30	洞爺湖町立洞爺中学校	毛利郁也		厚岸町立真龍中学校	車塚花瑠香	岩見沢市立東光中学校	藤塚麗瑠
				中標津町立広陵中学校	楓川奈央	※美幌町立北中学校	田元　克
R01	登別明日中等教育学校	小路　藍花		帯広市立帯広第四中学校	吉田千玲	北斗市立茂辺地中学校	房田心玖
				岩見沢市立清園中学校	谷内　楓		

※R 2＝新型コロナウイルス感染症の影響により、「少年の主張」事業を中止　　※H30＝北海道150年記念　特別賞

毎月
第3
日曜日

ほーんわか、ほーっとする日。

道民家庭の日

「道民家庭の日」は家族みんなでふれあい、団らんする日です

家族そろって食事をしたり、
家族が団らんする機会を持ちましょう。

家族ふれあい協賛店・施設を利用しよう！

毎月第3日曜日に子どもを連れた
家族が、料金の割引などのサービス
を受けることができます。

※優待券（コピー可能）の提出が必要です。
ホームページやフェイスブックから取得できます。

「道民家庭の日」
イメージキャラクター
ほーほーくん

ホームページ
はこちらから

Facebook
はこちらから

令和3年度

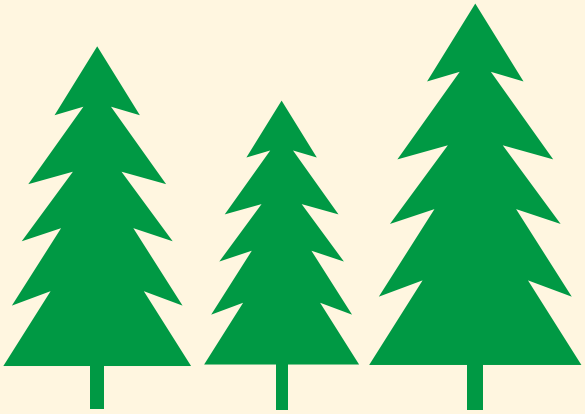
「少年の主張」全道大会発表作品集

発　行　公益財団法人北海道青少年育成協会

〒060-0005
札幌市中央区北５条西６丁目１番地23　第二道通ビル
TEL（011）231－6451　FAX（011）231－6457
URL　http://www.ikuseikyo.jp/
E-mail　youth@ikuseikyo.jp

北の大地に輝け 君の青春

北海道
青少年基金



伸びよう　伸ばそう　青少年

北海道青少年基金にご協力を

- 北海道青少年基金は、北海道110年記念事業として、21世紀の北海道の担い手となる若者たちが積極的に社会に参加し、連帯の輪を広げていくことを願って創設されたものです。

- この基金は、青少年の社会貢献活動、文化活動、グループ活動を支援、助長するために活用されます。

- 北の大地に躍動する若い力を応援するため、皆様のご協力をお願いいたします。